

# 歴史班による研究の進捗状況

中村只吾・竹原万雄

## 1 歴史班による研究の目的と方針

歴史班では、これまでの4年間、主に中世～近・現代の時間幅での、日本東北地方を主とした集落史研究を実施してきた。それらの研究は「集住の関係史」と総称している。集落の形成・維持の前提となる、土地や水面といった空間の所有・活用状況、信仰・宗教や地域リーダーといった集落の紐帯となる要素など、広く物質から精神までを手がかりに、時代や地域ごとの集落結節の様態を捉え、その時期その土地にそのバランスで存立した背景の解明を目指している。主要な検討対象は、青森県八戸市南郷区島守地区、岩手県一関市巖美町本寺地区、山形県山形市南原町旧前田村地区、同市滝山地区、同市蔵王上野地区、宮城県気仙沼市唐桑町鮎立地区である。

当班は、学内共同研究員である竹原万雄、中村只吾、学外共同研究員である入間田宣夫、菊池勇夫、高橋美貴、村上一馬、佐藤健治を主要メンバーとし、その他、古里淳、村上めぐみ、斎藤善之、渡辺尚志、藤方博之、佐藤正三郎らが適宜、研究協力者として加わる形で運営されてきた。さらには、PDの佐藤未希も、昨年度同様に適宜、当班の調査・研究に参加している。

## 2 今年度の取り組み

当班は本事業内で設定した研究テーマ「地域比較研究」に従事している。当テーマでは、中世以降現代までを主対象に、自然のほか経済的・政治的環境をも重視しながら集落動態を追究する。ただし、部分的に地域資源活用研究と連携した活動を行う。以下、対象地域ごとに、今年度の活動状況を報告する。

### (1) 青森県八戸市南郷区島守地区

3年目までの継続的調査・研究を実施した。現地調査の実施は1回であり、一つには、昨年8月に実施した巻集落および沢代集落の水田調査の補足的調査を行った。加えて、民俗・人類学分野との連携という点で、当該分野を専攻する大学院生を調査メンバーに加えて、当地区の信仰面に関する調査も開始した。島守周辺における庚申塔や庚申講、島守の各部落に必ず一つはあったというジョウヤドウ（庚申講や二十三夜待などの際に籠もったという）など、信仰に関わる事項についての巡見や聞き取り調査、文献収集などをおこなった。

加えて、7月に開催した本事業の第4回全体研究会の分科会において、菊池が「近世の島守村一村社会の成り立ちと人々の暮し」と題した報告をおこなったように、近世島守の様子を古文書から解明する作業も進められている。

さらには、当地区や後述する本寺地区といった、水田利用に基づく集落の変遷に軸を定めた研究を相対化するため、村上一馬が中心となって、八戸藩の諸日記をもとにした狩猟関係史料集の編集作業を今年度も進めた。今年度中に『八戸藩庁日記狩猟関係史料集』が刊行される予定である。また、八戸藩日記にみえる狩猟関係史料、すなわち、八戸藩での狩猟のあり方の独自性を考証するための比較材料として、秋田藩日記（「秋田北家日記」秋田県公文書館所蔵）における狩猟関係史料の調査も開始した。

### (2) 岩手県一関市巖美町本寺地区

当地区の研究では人口・景観・生業といった視点から「集住の関係史」にアプローチしている。昨年度

に刊行したブックレット『東北一万年のフィールドワーク11 本寺 山間に息づくむらの暮らし』ではおよそ1,000年におよぶ歴史のうち景観と生業についてまとめたが、本年度は人口動態を整理し、人口増を支えた生業について展望した。その結果、江戸時代の17世紀・19世紀と明治期以降の人口増を確認し、それを支えた生業として田畑の新田開発や木工品を中心とした産物、とくに大正期には製炭と養蚕が特記すべきものであったことを明らかにした。

以上の研究については「骨寺村荘園遺跡村落調査研究会」（12月10日）にて「本寺の人口変遷と生業」として報告し、本報告書でも「中山間地の人口変遷と生業 ―岩手県一関市巖美町本寺地区を事例として―」として掲載している。また、ブックレットの内容を含めてこれまでの研究成果を『平成27年度「一関ふるさと学習院』』（10月21日）で報告する機会を得た。加えて、2月21日には一関図書館にて本年度のまとめとなる「骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告会」が開催され、入間田が「骨寺村の成立は、いつまでさかのぼるか―骨寺村研究の過去・現在・未来」、菊池が「18世紀前期の村社会の変容―享保の本寺・山谷人数改帳を読む」、竹原が「本寺の人口変遷と生業」として改めて報告した。

### (3) 山形県山形市南原町旧前田村地区

当地区については、前田陸会の協力を得ながら同地区南原町公民館に伝来した「前田村文書」をもとに研究をすすめている。

今年度は、南原町公民館で2回の研究報告会を開催した。1回目は、7月に竹原が「245年前の「前田村文書」と題し、明和7（1770）年に作成された「請取申諸帳面之事」をもとに、名主交代の際に引き継がれた文書を分析した。その結果、納税（年貢納入）・土地・戸籍といった現在でも役所で管理される基礎的な情報、裁判の証拠書類、金銭管理に関する文書等が引き継がれたこと、それらが100年以上後の裁判の証拠書類として使用されたことを紹介した。

2回目は1月に全体のタイトルを「明治時代の用水確保」と題し、東海林怜奈・別府美空・三浦真紀子が「現在の前田堰」、佐竹美香が「明治8（1875）年の用水確保」、高橋千紘が「狐塚の用水願い」、林杏奈が「留水」の方法について報告した（報告者は本学歴史遺産学科3年）。報告後は史料を読んだだけでは判然としなかった地名や留水方法について地元の方々からご教示をいただき、明治時代以降の用水について見識を深めることができた。なお、本研究会にむけて11月14日に前田堰の現地調査も実施した。

旧前田村地区研究のまとめともなる『前田村文書目録』の刊行については、既刊の『前田村文書』（前田町陸会 2005年）との照合を行った上で来年度に刊行したい。

### (4) 山形県山形市蔵王上野地区

当地区の共有文書の整理・目録作成作業を引き続き実施した。近世の出羽村山地域の特質として、個別領主の錯綜状況という点がある。当地区もまた、そうした村山地域に位置し、近世には下総国佐倉藩の飛地領であった時期もあり、佐倉藩関係史料のほか、近世～近・現代の豊富な史料が残されている。集落の歴史的推移について、政治的状況をふまえて検討する上で、適当な素材になるのではないかと考えられる。今年度は、近世～昭和にかけての帳簿類を中心に、現地での未整理史料の整理・目録作成作業を1回おこなった。その調査では、たとえば、近世後期の「社倉積立小前書上帳」「田畑名寄帳」「願書写留置覚帳」、明治期の「土地台帳」、昭和戦前期の「区費徴収簿」などの所在を確認できた。当地区に関する基礎的史料として重要なものと考えられる。今年度分としては80点、昨年度分と合計して644点の史料目録作成が完了した。

### (5) 宮城県気仙沼市唐桑町<sup>しびたち</sup>鮪立地区

民俗・人類班との協働という形で、気仙沼市唐桑町鮪立地区の調査を昨年度に引き続きおこなった。当

地区は、近世における紀州漁民の入漁と定着、現代における遠洋マグロ漁への進出など、漁業を介した広域規模の動態がうかがえる地域である。とはいえ、当地区の暮らしは海のみで成り立っていたわけではない。当然ながら、陸地には寝食の場たる宅地が展開していたし、耕地も少なからず存在していた。沿岸部とはいえ、海と陸、その双方をふまえることが必要であろう。近世～近・現代の当地区の歴史を、そうした海を舞台としたダイナミズムのもとで捉えるとともに、海・陸含めた場としての集落史の叙述を目指している。調査・研究に際しての骨組みとして昨年度設定したのが、大規模旧家の役割、海・陸合わせた生業（および食・住）の姿、信仰のあり方、の三項目である。今年度は5回の現地調査を実施した。また、本調査は、地域資源活用研究とも連携しており、調査に参加した学生が主体となって制作するブックレット『東北一万年のフィールドワーク12 鮪立』（仮）が今年度中に刊行の予定である。

#### (6) その他の行事など

10月に民俗・人類班と合同で合同研究会「漁業集落をめぐる地先漁業権の成立と変化」を開催した。中村が「近世～明治期の東日本における漁業秩序—伊豆国内浦・出羽国飛鳥を事例に」、緒方賢一（研究協力者、高知大）が「漁業権制度の現状と課題—高知県を素材として」、高橋が「19世紀の水産資源繁殖政策と資源変動—自己紹介と話題提供」と題して報告した。本事業を進めてきたなかで浮かび上がってきたのが、特に第1次産業を基盤とした従来型の集落の存続を支えてきた、「家」制度と山野河海にかかる権利関係に関する歴史的動向の問題である。本研究会は、そのなかでも漁業・水域に関する権利の歴史的推移や基本的事項について考える機会となった。

### 3 来年度の取り組み予定と今後の展望など

#### (1) 青森県八戸市南郷区島守地区

作成した水田実測図や関係古文書、現地での聞き書き作業などをもとに、当地区の中世～近世～近・現代の生業・生活状況の復元作業を進める。今年度より新たに調査を開始した信仰面についても、かつて行われていた庚申講などの集まりごとの様子や、ジョウヤドウの所在などについて、引き続き調査・研究を進めてゆきたい。それらをもって調査・研究のまとめ作業へと移ってゆく。

村上による秋田藩日記における狩猟関係史料の調査についてもまとめてゆき、史料の収集状況によっては、八戸藩同様に史料集を作成することを考えたい。

#### (2) 岩手県一関市巖美町本寺地区

本年度の成果である人口動態の概要をふまえ、これまでも使用してきた「陸奥国磐井郡五申村本寺佐藤家文書」および「陸奥国磐井郡五申村山谷佐藤家文書」のうち人口動態がわかる江戸時代の宗門人別帳や明治時代の戸籍帳からその具体像を分析する。総じて人口・景観・生業の視点から中山間地の「集住の関係史」としてまとめることで、本研究の最終成果としたい。その際、市街地近隣の平野部（旧前田村地区）との比較も試みたい。

#### (3) 山形県山形市南原町旧前田村地区

今年度同様に地元での研究報告会を実施するとともに、当該地区研究のまとめとなる『前田村文書目録』を完成させる。目録の解題ではこれまでの研究をふまえた旧前田村地区の人口・景観・生業の変遷についても整理し、中山間地（本寺地区）との比較も試みたい。

#### (4) 山形県山形市蔵王上野地区

残りの未整理史料について整理・目録作成作業を継続し、現地調査の完了を目指す。それとともに、作

成した史料目録全体を整理・統合してまとめる作業もおこなってゆく。

#### (5) 宮城県気仙沼市唐桑町鮪立地区

本事業の最終年度にあたり、大規模旧家の役割、海・陸合わせた生業（および食・住）の姿、信仰のあり方、の三項目を骨組みとした本調査・研究のまとめをおこなってゆく。その際には特に家の立地や構造、信仰に関わる場など、集落に関わる空間利用・所有の問題に注目しながら進めてゆきたい。上述した今年度刊行予定のブックレット『東北一万年のフィールドワーク12 鮪立』（仮）のほか、学術論文などの形で成果をまとめてゆきたい。また、成果の地域還元の一環として、ブックレットの地元への配布もおこないたい。

今年度は、昨年度からの調査・研究の継続が主たる活動であった。そのなかで、島守地区および鮪立地区の調査・研究については、それぞれ今年度中の史料集、ブックレットの刊行を予定している。当班の調査・研究の着実な進展と成果への結実が図られたといえよう。

ところで、一昨年度の当班の進捗状況報告にて、下記のような文章を記した。

これまでに当班が研究を進めてきたなかで重要な論点の一つとして浮上してきたのは、「所有」をめぐる問題だといえる。「所有」については、歴史学において古くから議論がなされてきた。何をどのように「所有」することを選択した結果、集落が形成され、維持され、変容し、はたまた衰退し、消滅していったのか、という点で、現在の集落史研究にあっても重要な論点になり得ると考えられる。

…（中略）…

次年度以降、調査・研究を進めてゆくことで、そもそも「所有」とは何なのかという、根源的な問題の問い直しにまで到達することを目指したい。それは、生業にもとづく従来型の集落が消滅しかけ、新たな集落像の提案が求められている現状のなかで、重要な論点を提供することになるはずである。それは、当班のみの力では達成し難い目標であり、その点でも、次年度以降、他班との連携をさらに強めながら調査・研究を進めてゆきたい。（13頁）

上記は、昨年度の当班の進捗状況報告の末尾においても引用した。この論点は、最終年度の当班の活動に際しても、やはり引き続き重要なものになると思われる。島守や本寺、前田各地区にあつては、耕地を軸としたうえで、山林など他の自然資源や信仰・宗教「資源」などをもおさえながら、集落という場にみられる「所有」関係の実態・動態を整理してゆくことが有効ではなかろうか。それはまた、鮪立地区のような、集落空間に海を擁する場所についても同様であろう。また、本事業全体としても、最終的な目的である新たな地域社会・集落形成に関する理念構築にあたり、有効な論点になると思われる。